

## 日本健康教育学会のこれまでとこれから

理事長，社会福祉法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所・所長 衛藤 隆

私は、2005年に理事長に就任後、現在3期目を務めている。この7月にて丸8年になる。来し方をふり返ると、本学会はその内容がかなり充実してきたと思う。本学会のホームページをご覧いただければ、これまでの歩みの概要と現在展開している活動の様子を俯瞰できる。ここに至るまでには多くの人々の知恵と労働（＝「汗」）が注がれており、ひと言では言い尽くせぬほどの感謝の念に耐えない。年次学術大会や本学会主催のセミナー、研究会等に参加していただければ多くの人々が感ずると思われる本学会の特徴がある。その特徴とはこの学会が大切にしているものであり、様々な異なる意見を出し合える雰囲気であったり、ヘルスプロモーションや健康教育にかかわる活発な討論であったりする。

しかしながら、以上の思いはそれとして、客観的に眺めれば本学会はまだ発展途上にある学術団体である。発足後22年であり、人の発達段階に例えれば青年期である。今後も着実に歩みを重ね、さらに内容を充実させていくことが大切であると考えている。本学会がこれまで築きあげてきたものと今後検討すべき課題としてどのようなものがあるかを考えてみたい。

本学会設立の趣旨は「健康教育・ヘルスプロモーションの充実・推進およびその普及を図ることを目的とする」となっており、これらを実現するため、年次学術大会の開催（年1回）、シンポジウム・セミナーの開催（年1回程度）、学会誌の刊行（年4回）、理事会・評議員会の開催、委員会・研究会活動などを行っている。学会員の構成をみると、地域保健、学校保健、産業保健の各分野をはじめ実に多岐にわたっている。健康教育の対象も乳幼児から高齢者まで多様である。このような多様な関心を有する構成員が共有できる学術的価値は何なのかを追求しながら運営を模索して来た。領域を越えて理解を深めるためには用語の概念を明確にすることは重要である。本学会の基本概念である「健康教育」や「ヘルスプロモーション」とは何なのかについても検討し、案をまとめ、「当学会が考える『健康教育』と『ヘルスプロモーション』とは」をホームページに掲載した。<<http://nkkgeiyo.ac.jp/pg298.html>>

学術団体として学会誌の定期的刊行と年次学術大会の開催は重要な任務である。この8年間で、日本健康教育学会誌が年間4号を着実に発刊できる体制となったこと、投稿規程の改訂を行い、編集体制を見直し、改善してきたこと等は歴代の編集担当理事および編集委員会のメンバーの方々の方々の尽力によるところが大きい。また、過去の刊行物をアーカイブとしてJ-STAGEを通じ公開する体制を創設したことも本学会の存在を広く社会にアピールする上で貢献している。

年次学術大会は評議員あるいは理事である会員に地域性を考慮しつつお願いし、毎年特徴ある大会として開催いただいていた。一般演題の他に「ラウンドテーブル・ディスカッション」があることも本学会の特徴の一つになっている。参加することにより学びを深めことの出来る体験は多くの参加者に新鮮な感銘を与えて来た。

日本学術会議に加盟し、公衆衛生関連の他の学協会ともゆるやかな交流をもちつつ、学術団体としての本学会の立場を明確に示すことが出来るようになった。

以上の他、ホームページを充実させ、更新をタイムリーに行ってきたこと、会費の請求に工夫を加え、

納入率を高めたこと、年次学術大会とは別にセミナーを開催するようにしたこと、ヘルスプロモーション・健康教育国際連合（International Union for Health Promotion and Education, IUHPE）に機関会員として加盟し、特に北部西太平洋地域（Northern part of the Western Pacific, NPWP）において近隣諸国との交流に努めたこと等が活動の成果ないし特徴としてあげられる。

少子高齢化の進展したわが国において、健康課題への挑戦や対処について、健康教育に求められる役割は益々大きく、重くなると予想される。その学術面を担当する本学会が担うべき役割は何であり、さらに何が必要なのか等を今後検討しなければならない。これらの職務を担うためには、現在の任意団体より公共性の高い一般社団法人のような組織体制をとることを考え始めてはどうかと考えている。この点については過去にも検討の俎上に乗ったことはあったが、その時点ではすぐに検討を始める段階ではないとの合意に達し、見送られてきた。会員数が1,000人を越し、約1,200名となった現在、学術団体としての社会的認知、信頼を得る意味で、また、組織としての継続性を考慮すると、検討に値すると思う。他学会の法人移行例等を参考としつつ、現状からシームレスに移行できる方策を考えてはどうだろうか。本学会のもつ良さを保ちつつ、さらに発展・充実するためにどうすればよいか、会員の皆様の意見を聞きつつ考えを深めていきたい。